

去年の12月に私の母がガンで亡くなりました。母の病気が見つかったのは私が中学三年の時で、すい臓に悪性の腫瘍が見つかり、入院をされると言われた当時はまさか二年後には母が亡くなっていることを考えられるわけでもありませんでした。退院していつも通りに過ごしていた母でしたが、その一年後、私が中期留学に行き帰国して成田に着いたとき迎えに来たのは父と兄で母の姿はありませんでした。電車に乗っているとき母からLINEが届きました。「ガンがすい臓から転移していることがわかりました。もう手術ができないので、抗がん剤で治療をします。今は副作用で髪が抜けて、熱が出たりお腹が痛くなって一年くらい不自由な思いをさせるけどガンは決して治らない病気ではないので力を貸してね」私は大きなショックと留学中に母と電話で話しているときにその異変に気付けなかった自分の無神経さを痛感しました。私はこの時から母の死への意識を持つようになりました。母の闘病生活は想像以上に過酷でした。すい臓に関することやガンで亡くなった人のニュースが母の目に入らないようにすることしか、私にできることはありませんでした。そして九月のある日、私と兄は父に呼び出されました。「お母さんの命は、もってあと数か月しかない。」私は父の涙を初めて見ました。無愛想だけど愛情深い父、家庭をいつも明るくしてくれる母、文武両道の兄がいて私の家族は成り立っていました。何より私は母のことが大好きでした。家庭内では良妻賢母であり、一人の女性として自分の好きなことを仕事にする上に社交的で誰からも好かれる母は非の打ちどころがない人でした。私の日常や勉強の相談相手は必ず母で、喧嘩をしても途中でお互い笑ってしまう友達のような関係が私をいつも落ち着かせてくれました。

私はこれまで礼拝などで多くの生徒や先生方のお話を聞いてきました。身内を亡くした方が亡くなった方に感謝を伝えたりするなど、出来たはずのことが出来なかった後悔や、大切なものを失ってから気づいたという内容のお話を聞いていたので、私は母が亡くなくても後悔したくないという思いを強く抱いていました。ここまで私を深い愛で育ててくれたことへの感謝を伝え、毎日他愛のないことを話し合い母が笑顔になるように努めて、家でも病院でも一人で心細い母の手を学校へ行く前や、帰ったあと必ず握っていました。小さいことのように思えたこれらのことは、母にとっても私にとっても、多くの時間を共に過ごしたり、元気づけたりする点で、とても意味ある行動でした。母が自分にとっていかに大切な存在であるかということにも気付いていたので、私は後悔することなく母親を看取れたと思っています。また、私にとっての幸せとは家族4人で過ごした何気ない日常でした。家族が一人欠けてしまいかつての日常でなくなった今、私が味わっているのは新しい日常のような輝いたものではなくて喪失感です。以前の私が色々な人のお話から考えたように、私の感話を通して、少しでも多くの人が自分の周りにいる大切な人や物の存在に気づき、それに対して小さなことでも働きかける手助けができたらと思っています。自分の大切なものや幸せはいつなくなってもおかしくありません。そして喪失への心構えが仮に出来ていたとしても失ったことへの代償はとても大きいです。自分が喪失感に駆られている間、世の中は御構い無しに動いていて、自分にとっての日常が大きく変わったとしても世の中の日常は変わらないことや、自分と

似た境遇の人がすぐ近くにいるかもしれないと今まで思いもしなかったことを想像するようになりました。その中で逃げずに、真っすぐに現実を受け止めることが一人の人間としての成長であるとの1年を通して感じています。

私にとって母がいかに大切であるかは分かっていたと述べましたが、頭では分かっていたものの、自分の心はそう簡単に環境の変化に付いていくことが出来ませんでした。12月6日の早朝、母の容体が急変したと連絡が入りました。いつどうなってもおかしくないと覚悟は前からしていました。急いで病院に行き、死に立ち会うことが出来ました。毎日握っていた母の手からは温かさが消えていました。ただ冷たいという言葉では言い表すことができない、亡くなったという現実を突きつけられているようなあの手の感触は忘れられません。休む暇もなく葬儀が行われ、一息ついて久しぶりに登校しました。途中で苦しくなったらとか変に気を遣われたら嫌だなと思っていましたが、そのような心配は必要ありませんでした。けれども、学校から帰宅しても家の中は真っ暗で、「おかえり」といつも言ってくれた母の姿は家どころか病院のベッドにさえいないことを再確認し、涙が溢れました。かつて私が幸せだと感じていたあの日常にあった家の温かさがなくて、母の姿は遺影とお骨に化してそこにポツンと置いてあるだけになりました。そして私はぼーっとする時間が増え、何も出来なくなりました。学校にも行かない、部屋からも出ない、何も口にしない、父と兄と会話をしない。いつでも自分の側にいてくれると信じていた人がいなくなり、どうやってこれから生きていくのかわからず、ただ母に会いたくて仕方ありませんでした。全てを投げ出してしまう勇気もないし、ずっと部屋にこもってしまってもどうしようもないことも分かっていたましたが、相談相手が母であった私は誰に相談すればよいのかわからない状態でした。そのような時に母の死を知った友人から電話がかかってきました。LINEの返信が来ないから電話をかけたと少し強引だけど私を心配する友人に頼って今まで誰にも話せなかったことを全て話しました。泣きながら上手く言葉を発せない私にイライラすることなく、友人は静かに私の話を聞いてくれました。私は途中から落ち着きを取り戻している自分に気が付きました。そして、葬儀に母と会ったこともない友人が来てくれたのを見てどこか安心してことを思い出し、変に気を遣わずに今までのように楽しく話して、時には家のことを聞いてくれる彼女たちにも多く救われました。私の周りには友人たちがいました。私が必要としていたのは的確なアドバイスをしてくれる大人ではなくて、ただ話を聞いてくれる彼女たちの存在でした。友人だけではなくて父も私を支えてくれる存在です。私の父は忙しい仕事をしているうえに家事をすべて自分でやります。私が手伝おうとしても受験生だからといって私にはさせません。父は出張などで不在な時以外、私のお弁当を作り忘れたこともなければ、出来合いのものを買って詰めたこともありません。私は父の見返りを求めない、娘である私をただ育てているだけではない、深い愛情を感じます。

母が亡くなってから今まで人との繋がりを強く考える一年でした。家族一人一人との繋がり、友人間の繋がり、それらの繋がりにはそれぞれ形の異なった愛情があり、人は多くの繋がりの中で生きています。私は学校を休んでいる間、これからどのように生きていくのかを深く考えていました。自分にとっての幸せであったかつての日常はもうどこにもなく、自分の未来を想像してもあのような日常の中で幸せに暮らしている自分が思い浮かびません。しかし、過去

にとらわれすぎてもいけないと思いました。私は今まで後悔することもなかったし、選択を間違えたと思った時でもその選択肢の良い点を見出すような現実的な考え方をしてきたからです。では、過去に執着しすぎてもいけないし、自分の望む未来が見えていないのなら私がすべきことは何なのか。それは現在に向き合うことでした。過去を基にして現在をどのように生きて、未来にどうかして行くのか。そして、生きている間に人との繋がりの中で自分が得られるもの、与えられるものは何なのかを理解することです。私は母から数えきれないほど与えられたものを持っています。例えば、ありがとう、ごめんなさいをいえるようになりなさいということです。自分が他者との繋がりの中で生きる上で他者との間にある思いやりは当たり前には起こるものではなく、相手を大切だと思う気持ちからであることに気が付きなさいという意味だと思います。このような直接言葉で与えられたものばかりではありません。言葉で言い表せないものや、すでに自然と行動に移していることもあると思います。私にとって今を生きるということは、これから毎日生活する中で母から与えられた多くのことを生かしたり、わからなかったことを発見することです。そのことが、亡き母と残された私の繋がりだと思っています。母の死からは喪失感や悲しみだけが残ったわけではありません。多くの人との繋がりの中で自分が支えられて生きていること、自分の生き方と向き合うきっかけを与えてくれました。母の死を経て私は成長し、強くなりました。自分がこれから生きていく中で母が与えてくれた多くのものに気づき、他者との繋がりの中でそれを生かすことができたのなら、そのことがわたしにとっての大きな親孝行であると信じています。